

小説

深海魚

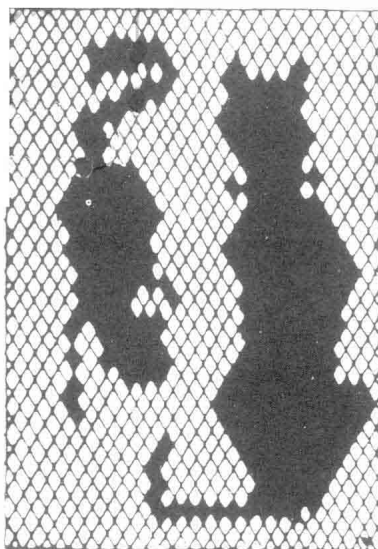
杉本利男



小説

深海魚

杉本利男



永田書房

杉本利男（すぎもと としお）

昭和13年、福井県生まれ。

中央大学大学院博士課程（哲学）修了。

著書（小説）「錆びた十字架」「うぶけの小鳥」「唐変木」
「ジパングの風」「石燈籠」など

日本ペンクラブ、日本文藝家協会各会員

住所 〒183-0034

東京都府中市住吉町2-30-31 住吉住宅4-806

平成十二年十月十日 印刷
平成十二年十月二十日 発行
定価本体一、八〇〇円
（税別）

著者 杉本利男

発行者 永田龍太郎

発行所 永田書房

〒一五二〇〇〇四

東京都目黒区鷹番三ノ七ノ一三

電話 (三七二二)二七七〇

印刷 (株)コンボーズ・ユニ

製本 河上製本(株)

製函 (有)斎藤商会

装幀 李友唯

目次

どうだんつつじ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

ご破算願いましては・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

三月五日午前十時・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

ばらばらパーティー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71

連れ猫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105

前庭の光景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127

深海魚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161

もつれ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・199

乗り継ぎ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・221

『深海魚』によせて

久保田正文
241

小

説

深
海

魚

どうだんつつじ

たまには戻つて来たら、と年老いた母からたびたび電話がかかってくる。そのつど昭夫はそのうち暇になったら、とお茶を濁してきた。芳恵とのがあつてから、むげに断り続けているのも不自然に感じられ始めた。そう思うと急に千葉の実家に帰ってみる氣になった。昭夫は、その後で芳恵とのことを決断しようと思つた。

土曜、日曜の休日は、ピアノのセールスで家庭訪問の予約が入っていたり、ピアノ教室の催しものの企画が集中していたりして、かえつて忙しい。母は近頃どこかに勤めていて、わずかながらも金を得ているようだ。積極的でないのも事実だが、双方の都合のよい時間を工面するのは、なかなか容易ではない。

「時間なんていつだっていい、いつでも家をあけて待つてゐるから。必ず戻つておいで」母はいつも最後にはしびれを切らし、電話口で吐き捨てるように氣短に言う。

ようやく土曜の午後と、日曜日を丸一日空けることができた。こうして無理に休みを取っ

た前後には、その皺寄せがあるのはやむをえないことだった。母が折をみて顔を見せろというのは、芳恵とのことを知りたがっているのに違いない。芳恵との結婚を待ち望んでいるような口ぶりだった。

「聞いてほしい話があるの」

芳恵がそう言ってきたのは、十日ほど前のことだった。

芳恵は昭夫と同じ会社に所属していて、ピアノの調律師をしている。音感のほかに力仕事でもあるから、女性の調律師の数はきわめて少ない。この四月以来、付き合い始めて七か月になる。一か月ほど前には、何も話さなくても一緒にいるだけで楽しい、と芳恵は言っていた。そんな芳恵が退勤時に、聞いてほしい話があるの……と切り出したので、昭夫はどきりとした。あわててスーツの内ポケットからタバコを取り出し、おもむろに喫煙コーナーの方へ歩み寄った。心の中に、少しばかりやましいことがあったからだった。芳恵も静かに昭夫の後を追って来た。

「聞いてほしいって、……何だい」

昭夫はかすかに指を震わせながら、タバコに火をつけた。昭夫には、芳恵の問いたがっていることが分かる氣もした。どきりとしたのは、自分の氣持がまだはつきり定まっていなか

つたからだった。

「お願いって、言ったらいいのかしらね。夕飯でも食べながら言うわ」

「なんだ、そんなことなのか」

昭夫は深々とタバコを吸いながら、白い粒石の敷いてある灰皿に視線を落していた。

「今日は私が料理してあげるわ。この間、あなたの作って下さったカレーライス、とてもおいしかったわ。あなたと一緒にだと気が休まるの」

「あなたつての、よせよ。……ここじゃ、まずいよ。人目につくとまずいよ」

「いいじゃない？ わたしたち……」

社内で芳恵と肩を並べていると、昭夫はいつも窮屈に感じるのだった。

二人は黙って鉄製の手摺を握んで、昭夫のアパートの階段を上がっていた。廊下の鉄柵には、お揃いの洋傘が広げて乾かしてあった。薄暗い廊下の蛍光灯を頼りに鍵を開け、二人は逃げ込むようにして部屋に入った。白い壁土が剥げ落ちた辺りにスイッチがあった。棒状の蛍光灯が室内を赤々と照らし出した。殺風景だったが温かみの感じられる部屋だった。

「この前も、そう思ったけれど、外見よりきれいじゃないの。でもよく見ると、やはり相当古いわね。部屋代と相談だから、しょうがないわね。あんまり見ない方がいいみたい」

「見詰め過ぎると、穴があくぞ」

昭夫は、芳恵の夫婦気取りな話しかけに疲れを覚えた。

「いやだわ、穴があくだなんて」

芳恵が肩を震わせて、ころころ笑っている。

「ちよつと、静かにしてろよ」

そう言い捨てて、昭夫はトイレに向かった。

「この前来た時、掃除をしてあげたのに、もう、こうだもんね。使ったものを、あつた場所に戻しさえすれば、いつもきれいなお部屋にいられるのに」

昭夫の背に吹きつけるように言ってから、芳恵は部屋の隅の座机の前にいったん坐った。奥の台所へ行こうと立ち上がった時、机の隅に置かれたダイヤル式の電話がジリジリッ、ジリジリッと鳴った。こもったような音が響き続けた。

「電話よ！」

昭夫の方に声をかけたが、返事がなかった。芳恵はつい事務所にいる感覚で、無造作に受話器を取った。取った後で、手ざわりが違うのを感じた。

「もしもし、……もしもし」

「あんた、だあれ？ 昭夫の母だけど」

芳恵は、昭夫の母だと聞かされて、昭夫のアパートに来ていたのをとつさに実感した。

「昭夫を出しておくれつ。あんたさん、どなた」

受話器の中の声が、急に明るく響いてきた。部屋に戻って、あわてている昭夫に、芳恵は受話器を手渡し、心配そうに昭夫の横顔を見つめている。

「ぜんぜん違ふよ、……そんなじゃないってば。それだったら、とつくに言ってるよ。何を喜んでるんだ。……うん、いいから、そんなこと。ああ、ありがとう。助かるよ。父さん、元気？ 寒くなるからなあ。気をつけなくちゃね。……うん、ありがとう。兄貴たちも元気だろうね。……そう？ 会ってるのか。珍しいじゃないの。父さん、忙しいのかな？ うん、……儲かってれば、いいんだけど、……そりゃ父さんの性格だからしょうがないよ。まあ、母さんらこそ仲よくやってくれよ、……うん、分かった、ありがとう。そうじゃないってば、……うん、その内かならず行くからさ」

昭夫が受話器をおくと同時に、芳恵は両手を合せて拝むように謝った。

「ごめんなさい。つい、いつもの癖で無神経に受話器を取っちゃったの」

「いいさ、……気にしなくていいよ」

昭夫は、そうは言ったものの、芳恵のことを母に完全に誤解されたのを残念に思った。陰でこそそそしていると思われるのが、何としても悔しかった。

昭夫はますます不機嫌になっている。黙って米を研ぎだし、気忙しく電気釜のスイッチを入れた。芳恵は冷蔵庫の中にある野菜や缶詰などで、惣菜を上手に作った。わかめの味噌汁もでき、二人は会話も交えないで夕飯を食べた。実家で父母や兄たちと一緒に食事をしているようで、昭夫は気が滅入ってきた。常日ごろ昭夫は、湿った雰囲気、食事はしたくない、と思っている。将来、誰と結婚しようとも、またどのような所帯を持つにしても、食事だけは明るく楽しく食べたいものだと思っている。最後の晚餐みたいな雰囲気はたまったものではないと、昭夫は考えている。

「ごめんなさいね、軽率に電話に出たりしたもんだから……」

「そんなこと、どうだっていいんだ。それより、相談って何だよ」

「あなたのお父さま、弁護士ですってね」

芳恵はうつむいたまま、茶碗を重ねながら遠慮がちに訊ねた。

「国選弁護や金にならない事件ばかり、引き受けているらしいよ。金儲けを悪徳のように考えている弁護士だね。まったく要領が悪いんだから。……それが何か？」

「わたしのね、実家が、敷地の境界線のこと、隣家に訴えられそうなのよ」

「地価が上がったから、そんな諍いがあちこちで起こるんだよ。で、実家はどこなのか？」

昭夫が面倒そうに話している。

「この前、お話しなかったかしら。茨城のかなり奥まった里村よ。お願いできるかしらね。あなたのお父様だと、何かにつけ安心なんだけれど」

「土地の良心的な弁護士を紹介することくらいなら、頼めると思うけれどな」

芳恵の相談がこのようなことであったので、昭夫は自分をますます分からなくした。安堵とともに、当てが外れたようにも思った。

実家へ戻る電車の中で、昭夫は母のことをほんやり考え続けていた。四十過ぎに生んだ一番末の息子が気がかりらしい。母は、独り暮しの昭夫の殺風景な部屋を想像し、息子が電話に出た女と結婚するのだろう、いや結婚させようとしているのかもしれない、と昭夫は苦々しく思っている。

乗り換えの電車が来るのを待ちながら、昭夫は実家でのことを思い出し、急に足が重くなったように感じた。母とだけなら、飯を食っていてもうまい。父と二人でなら、お茶を飲んでも楽しい。三人一緒だと食事をして、茶をすすつても、何をしていても明るい気分にならない。大勢で賑やかに食べる飯はうまいというのをよく耳にしたが、ほとんどその実感はなかった。昭夫にとって食事は、たいていの場合不愉快な儀式に思えた。

二人の兄たちもいた頃は、五人が一同に食卓についた。父はおおむね無言で、いつも不機

嫌に食事をするため、誰も陽気に話し出せずにいた。

父は特に母の顔の表情にうるさかった。父はいつも気難しそうな顔をして、母につらく当たっていた。昭夫には、それが今でも腑に落ちない。その反動で父のいない時は、家の中は狂ったように明るい声で満ち溢れた。兄弟は騒ぎたて、母も一緒に笑い崩れた。こうした明るさを、父は軽薄で下品なものと考えているらしかった。息子たちのいない現在、父と母二人きりのときは、父母がどうして過こしているのか、昭夫には見当もつかなかった。

昭夫は田舎にしては垢抜けした駅で下車した。手描きの民宿の広告や観光農園の宣伝ビラが、ボードをはみ出して何枚も張ってあった。

この前、田舎に帰った時には、まだ建築中だった弁当屋は完成し、忙しそうに営業していた。父のよく出かける碁会所は、今では弁当屋の建物の真うしろになり、表通りからはすっかり見えなくなっていた。集会所の角を左に曲がり、小路を五十メートルほど進むと、三叉路になっている。どうだんつつじの垣根に囲まれた船型をした屋敷が、昭夫の実家だった。冬の弱い日ざしが庭いっぱいに広がり、どうだんつつじのはっきりした縁どりが輝いて見えた。遠く離れた場所からは、ルオーの描いた人物像のようにさえ見える。

「母さん、俺に用事って、何んだよ。特別に呼び出したりしてさ」

昭夫は、母の顔を見るなり口早に尋ねた。

「お前、今度は、ゆつくりしていけるんだろう。大事なことから、気持ちを落ち着けてはちばち話すさ。もういい加減に決着をつけようと思ってるのよ。協力しなさい」

待ち構えていたように、母親は玄関に立ったままあわただしく話した。

「そんなにゆつくりもしておられないんだ。できれば早く仕事に戻りたいんだよ」

昭夫は聞くだけのことを聞き出したら、一刻も早く巣鴨のアパートに戻って、一人ではんやりしていたい心境だった。

「ちよつと留守番を頼むね。ここいらは鍵を掛けなくても安心だけれど、……誰もいない所へ入るのは寂しいだろうと思って、お前の来るのを待っていてやったのさ。母さん、公民館へ行くからね。もう、始まっているの。早く行かなきゃなんないのよ」

にと笑った母の口元が歪んで見えた。小さな歯の見える開けた口は、女らしい優しさを少しも感じさせなかった。一緒に暮していた頃は、母の口元をこんなふうに見たことはなかった。笑っているのに、明るさがにじんでいない。不自然な歪んだ顔に思えた。

「何をしに行くんだよ、せっかく戻って来たというのに」

話の相手もせずに出て行く母に、昭夫は苛立ちを感じた。

「体を動かさなきゃ、どんどん鈍ってしまつて、老いるからね」

「こんなだったら、あわてて戻ることもなかったな。……父さんは？」